

研究ノート

河口慧海と日本ネパール文化交流ことはじめ 2002年ネパール報告

高山 龍三

河口慧海が1899年にネパールに入国して百年余り、1902年にネパールから初めての留学生が来日して、2002年はちょうど百年になる。それを記念しての行事がネパールと日本でおこなわれることになり、まず4月7日カトマンズでシンポジウムが開かれ、私はそれに参加するよう要請を受けた。

2002年4月3日、ロイヤルネパール航空の直行便で関西空港を発ち、夕方カトマンズ空港に着いた。心配していたストライキも延期されほっとした。ストライキで車がなく、空港で一夜あかすことも覚悟して、食べ物、水を携行したが、嬉しい誤算であった。

園芸家で1958年私とヒマラヤに同行した並河治氏が集め、育て、梱包された苗木一百年前の留学生が持ち帰ったのと同じ、柿、栗、藤、菊一箱を、無事出迎いのH・B・バルア氏に渡した。

4月4日朝、ホテルの食堂で、慧海の越境路を調べた山岳作家の根深誠氏（ずっと同宿）と会う。昼、大使館文化担当の横山卓司二等書記官、バルア氏に会い、シンポジウムの打合せをした（田村）。その後大使館でコピー、仮植えされた苗木を見、その後大阪工大での教え子のジャヤ・プラダン君の新築の家に招かれた。

日本で心配されていたのと違って、表面上町の中は変わったことはなかった。通勤時には交通渋滞し、ほこりっぽいのは同じ。ただ夜の道には検問がたち、銃をもった兵隊がたっていた。夜の交通量は少ないので、車はよくとばせる。夜のパーティ、とくに

女性のそれはなくなった。S A A R C開催のおかげで道はよくなったという。メインの道はきれいになった。ホテルの部屋に入って驚いたことに、冷蔵庫がつき、NHKの放送がリアルタイムで見られるようになった。有線放送の普及のためだという。

4月5日、東京工大での教え子のムクンド・シャルマ氏と昼食、3時A・スベディ教授と会い、バルア夫妻に招かれて夕食（いな本）。4月6日、ミヌ&モヒニ・シュレスタさんと昼食（ファイアー&アイス）後、ライオンズ・クラブの集会（シャングリラ・ホテル）に。

4月7日、10時～4時半、大使館ホールで、日本大使館とJUSAN（日本大学留学生協会、ネパール）の共催、「ネパール人留学生渡日百年記念シンポジウム」が開かれた。

開会式にはA・P・ウパディヤヤ教育・スポーツ大臣、岡部孝道代理大使が挨拶を述べ、シンポジウム第一部、留学生派遣を発案したデヴ・シャムシェル・ラナ首相の曾孫、ヒマラヤ・シャムシェル・ラナ氏の座長で、バルア氏の「歴史的概観 日本へ行ったネパール人最初の留学生」が話され、T・P・ミシュラ教授ほかのコメントを得た。続いて、私は「河口慧海と日ネ文化交流ことはじめ」（後記）のペーパーを読み、スベディ教授のコメントを得た。

午後第二部はウペンドラ・マン・マラ教授の座長で、バドリ・P・シュレスタ前駐日大使の「日本で学んだネパール人の発展への貢献」と題する講演があり、P・ティ

ミルシナ教授ほかのコメントがあり、マラ教授が最後のまとめをした。

用意した椅子を追加するほどの盛会、昼食ブレイクには長い列ができ、会場から8人も立ってコメントを述べ、時間も予定を一時間も越えた。大使館も会の成功を喜ばれた。翌日新聞に写真入りで報道された。

4月8日、しかし大任を果たしたので気がゆるんだのと、昼夜の気温差、寝不足のためか、食欲不振、体調不良が続き、4月9日、国立古文書館で、慧海献上の一切経の目録、欠損・不良部分のコピーを贈呈、4月10日、帰りの切符のリコンファーム、11日、「秘境ヒマラヤ」のビデオテープのダビングをしたほか、4日間ホテルで休息した。朝のおかゆや果物のほか、何も食べられなかった。

4月12日、完全に復調、朝、トルポのラマ（ツアルカ村人のチョウキャップとキバルの息子、アムチー・タイイの孫）に記録映画「秘境ヒマラヤ」のビデオを見せると、44年前の自分の村、母を見て、興奮して叫んでいた。午後バルア氏の本の印刷原稿（日・英文）をたんねんに読み、チェックする。午後ポカラの「国際山岳博物館」準備のために赴任した友人の安藤久男氏来る。夕食バルア氏宅に招かれ、日本食をいただいで、校正打合せ。

4月13日、キド・ホテルへ、大学後輩の北濃祥二君（観光局アドバイザー）と会い、JICA所長の三苦英太郎氏宅に招かれ、新任のJICAボランティア、シニア・ボランティアらと日本食の昼食をいただいた。ネパールの材料で作られた巻きずし、赤飯、おはぎ、その他のご馳走に驚いた。夜、岡部公使宅に、シンポジウムに参加した、ヒマラヤ・S・ラナ氏、ミシュラ教授、バルア氏と招かれ、夫人がコックに指導されたサーモンとうなぎの押しずし、庭で作られた生野菜のサラダをいただいで感激した。予定のスベディ教授は欠席、あとで聞くと道を迷ったという。

4月14日、ネパールの新年、10時からミスさんの案内で、ティミ（カトマンズ〜バクタプール間にあるネワール人の町）へ行き、ビスケットという祭りの準備、壺づくりをみる。祭りは夕方から始まるという。2時から京都文教短期大学に研修に来たマノダラ・サキヤさんの案内でコパンにできたチベット仏教の僧院をみる。夕食は安藤、北濃氏としていると、宿の女主人ヒロコ・トゥラチャンさんも加わって、ネパールの観光を話しあった。

4月15日、根深氏とミンバワンにあるトポグラフィカル・サーベイへ行き、5万分の1、2.5万分の1地図を買う。これでネパールの北半分の五万全部と、カトマンズ、ポカラ周辺、20世紀初頭日本僧が歩いたタライ、ルンビニー帯の地図を集めたことになる。午後もう一度、ダプリの交換と追加購入に行く。ジャヤ一家をホテルに招き、夕食をともにする。日本で生まれた彼の子供は、日本の味付けしか食べないという。

4月16日、朝8時、カリ・カスタンにあるカトマンズ日本語学院に行き、授業を見学、R・K・ヴァルマ理事長に会い、彼の担当する卒業生クラスのゼミに参加した。ホテルや観光の実務につく彼らは笑顔で日本語を話した。九時授業終了後、先生たち（皆この学院の卒業生で若い人たち）に集まってもらって、話をした。一人は秋に埼玉に6か月日本語研修に行くという。授業は朝7〜9時と夕方1時間のみなので、昼間の空き時間を利用するよう、日本文化スクール（料理、アートフラワーなどネパール人のニーズを調べて）を開くよう提案した。その後ヴァルマ氏宅で早い昼食をいただいた。

その後、キング・ロードに行き、マチェンドラナートの山車づくりをビデオ取りし、アサンを通過してダルバール広場に行ったら、カスタマングアップの側のアショク・ピナヤ寺で、ガネシュ像などの奉納儀礼をしていた。ついでにいうと、カトマンズ、パタン

のダルバール広場に入るにも、観光客には税をとるようになった。

安藤氏の誕生パーティとして、北濃、JICAのS・K・バタチャン氏らと夕食をとった。

4月17日、10時、ラトナ書店へ、もうあまり買わないと決心していたが、やはり少し本を買った。昼、キング・ロードのナングロでPKの先生7人に招かれ、カレー料理、焼きそばをいただく。おみやげにパゴダの置物をいただいた。2時ジャヤ君と待ち合わせし、ネパール・スタディーズという本を書き出版しているハリハル・ジョシー氏に会おうと電話してもらったが不在で中止、町を歩いて、その後ジャヤ君の家を再訪、マトン・カツなどの夕食をいただいた。

4月18日、根深氏と大使館へ、12時すぎ、15日帰任された神長善次大使と会う。横山二等書記官同席、あとで佐藤三郎一等書記官も加わる。話題は主として根深氏のトルボ・ツアルカ村の橋建設プロジェクトになった。もっぱら「費用対効果」をいわれるが、私は「話題性」があるといって大笑いになった。

一時すぎTUのCNAS（トリブヴァン大学ネパール・アジア研究所）の迎えの車に乗り、キルティプールへ。ミシュラ教授の出迎えを受け、研究所の概要と問題、とくに日本研究をしたい、日本文化論の研究者を迎えたい、ここで日本研究しようとしたら、欧米人の書いた日本論しか利用できない、など協力の要請や希望を承った。その後所内を案内され、帰路についた。ホテル近くのカフェで遅い昼食。3時ラトナ書店再訪、2、3冊本を買い、本は送って貰うことにする。ホテルにバルア夫妻を招き、日本食をいただく。

4月19日、タメルのピルグリム書店でE・ヴァリの古い写真集「ドルポ」を350ドルで買い、1時待ち合わせてモヒニさん宅へ、カレーの昼食をいただく。大阪にいる彼女の夫と弟のマノハルへのことづかりも

のを受け取る。ただこんなカトマンズの町の中でも、近くの交番がマオイストによる襲撃で焼打ちされた跡を見た。

4時半大使館からの迎いで、ヤク&イエティ・ホテルへ、5時～7時、堺ライオンズ・クラブ&今西記念奨学基金の賞金授与式とパーティに参加、首相に次ぐ実力者といわれるC・ワグレ公共事業・計画大臣、神長大使、JUSAN会長と雑壇に上げられ、ビデオ取りができなくなった。同クラブの谷本陽蔵氏のメッセージを代読した。この賞は日本研究の論文を提出したネパール人に与えられるもので、今年は4回目。ラジ・バッタライ氏が「日本経営の獨創性」という論文で、賞状と2万5千ルピーの賞金を、あとふたりが賞状と記念品をもらった。パーティでは顔なじみの友人たちや、シンポジウムで知りあった人たちと交流した。大使にはシャルマとジャヤのふたりの教え子を紹介し、喜んでいただいた。

4月20日、朝涼しいうちから、歩いてパタンへ、頼まないのに案内を買ってくれたネパール人と、お寺を廻った。クンベシュワール、黄金寺、マチェンドラナート、マハブッダなど、最後にダルバールで別れた。百ルピー渡したら喜んでいて。そこから歩いてマンダラ作家のロック・チトラカルさんのアトリエに行ったが留守、電話してバルア氏にピックアップしてもらい、家へ、その後ご夫妻を誘って、ホテルで蕎麦をいただいた。三時すぎもう一度、キング・ロードへ、マチェンドラナートの山車の飾り付け、頂上の金具を飾り、スギの葉を付けているところまでビデオ取りした。

5時迎えを受けて、根深氏と大使公邸へ、神長大使ご夫妻と、持参した柿、栗、藤の植樹をした。藤は公邸の日本間の裏庭に植えられ、棚をつくっていただくことになった。菊は一本ずつ鉢植えにして、玄関脇に置かれた。お刺身、ごま豆腐などの日本料理をいただいた。大使のご著書『アジアのBCG』をいただく。9時すぎお断りして

公邸を辞し、そのまま空港へ直行、手続きをした。出国手続きに並んでいた日本人ふたりから、荷物のX線透視の係官から3千円取られたという話を聞いた。そのあと、私自身も携行荷物検査の係員から、「これは何だ」「おみやげだ」「おみやげには10ドル出せ」私は頭に来て「その関税の規則をみせろ」「これはネパール人に貰ったもので、それでは返してくれ」といったら、OKといって笑ってひきさがった。日本人とみればたかっているのではないか。いやな思いをあとに、7回目のネパールの旅は終わった。

河口慧海と日本ネパール文化交流ことはじめ

(2002年4月7日 在ネパール日本大使館ホールでおこなわれた「ネパール人留学生渡日百年記念シンポジウム」における講演の日本語原稿)

日本とネパールの交流は文化的な目的で始まった。それは日本とあるアジアの国々との交流が政治的、軍事的目的で始まったのに反して、幸運であった。

明治維新後、多くの若い僧侶たちが仏教の衰退をなげいた。その何人かは仏教經典の原典を求めて、ネパールやチベットに入ろうとした。

河口慧海 最初のネパール入国者

禅僧河口慧海はチベット探検家として知られているが、また初めてネパールに入った人であった。彼は1899年1月26日、ネパールに入国、1900年7月4日ヒマラヤの峠を越えて、チベットに入った。それ以後、彼はネパールに、1903、05、12、13年と、通算2年半も滞在した。

彼の有名な著書『チベット旅行記』によれば、その旅の目的は仏教のサンスクリット經典の原本と、そのチベット訳を集めることであった。河口は日本で印刷された漢

訳の一切經(トリピタカ)を読み、その原典からの翻訳に、様々な訳のあることを知り、そのうえ漢訳經典がヨーロッパの学者に過少評価されていることを知った。彼はまたサンスクリットの仏教原典はすでにインドになく、ネパールに残っているかもしれない、またチベット語訳は正確であることとの情報を得た。

河口は日本で漢語を、ダージリン、ムスタンのツアーラン、チベットでチベット語を、カルカッタ、カトマンズ、ヴァラナシでサンスクリットを学び、經典の比較研究を可能にした。

河口は四度ネパールを訪問した。

- 1 彼は中国僧に変装してネパールに密入国した(1899-1900)。
- 2 彼はそのラサで入獄している友人を救うため、チャンドラ・シャムシェル大王にとりなしてもらった(1903)。
- 3 彼は日本で印刷された漢訳仏教經典、一切經をチャンドラ・シャムシェル大王に献上した(1905)。
- 4 彼は高楠順次郎東大教授ほかひとりを案内して、ルンビニ、カトマンズに行った(1912、13)。

ネパールをめざした僧たち

ネパールに行こうとしたのは、河口だけではない。ある東洋学会の会報によれば、前世紀の初頭、天台宗の留学生大宮孝潤、真宗の留学生清水黙爾、真宗の僧織田得能は、ネパール入国をめざして、インドに滞在していた。そのうちのふたりは1902年5月ダージリンでサラット・チャンドラ・ダースに会い、ネパール語を学んだ。しかし清水がタライに入った以外入国していない。

清水は家族あての手紙のなかで、次のようにいった。河口はネパールに入った初の日本人であるが、ただ通過しただけである。私はネパールでサンスクリットの仏典を発見できなかったとしても、彼と違ってネパールの宗教、風俗を観察し、その報告の材

料を集めたい。そのためにインド語、ネパール語を研究して、ネパールに入りたい。

彼はヴァラナシでサンスクリットの勉強をしたが、1903年8月病気で亡くなった。

河口がネパールにいるころ、1903年2月－3月、大谷光瑞に率いられた探検隊の一員、島地大等はタライで仏蹟調査をした。ネパールのビルガンジを出発、西北に進み、マファン村から北に森林に入り、チューリア山脈を横断し、ラプチ川の上流に達し、西へ進み、ナラヤニ川まで出て、インドへ出た。

のちにネパール入りした高野山の長谷部隆諦の記録によれば、島地はタライの森林の終わるあたりで、追い返されて失敗した。

1903年2月－3月、大谷光瑞に率いられた探検隊の一員、清水黙爾、本多惠隆、井上弘圓はタライに入り、アラウラコット、チラウラコット、ルンミンディ（ルンビニ）に行き、仏蹟調査をした。

河口慧海とネパール人留学生

1903年5月、河口は日本に帰国したが、当時の新聞によれば、2か月後、東京で留学生ジャンガ・ナルシン・ラナほか一名と会った。彼らはネパール語で、ネパールの状況を話し合ったのち、河口がネパールの民謡を歌ったのを聞いて、ふたりの留学生は驚き、手を打って喜んだ。大王から依頼された留学生と監督者の間の誤解について、大王に報告した。

1904年、ボーダナートの住職、ブッダ・ヴァジュラが河口に手紙を送り、日露戦争について聞いてきた。河口は開戦の理由、状況など、詳しくチベット語で返事を出した。河口は大王の要求によったものと推測した。

一切経の献上と「ザ・メモリアル」の提出

河口はカトマンズその他で、サンスクリットの仏教経典の収集をしたが、そう容易に集まらなかった。彼は日本の一切経と交

換に、経典を入手したいと、大王に願い出た。

河口は京都の近くの宇治にある黄檗山萬福寺で印刷された一切経をたずさえ、1905年大王に献上した。その寺は河口がかつて所属した寺で、そこで一切経を読み、漢訳への疑問を持ったところである。

彼は大量の一切経をブリキで内張りした特別製の木箱に入れて持って来た。ボンベイの倉庫で火事があり、彼の荷物は火災にあったとの報せが来たが、さいわい経を入れた荷のみは助かった。

河口は唐箕、すなわち粳を米と粳穀に分ける器械、水車の模型を持って来た。彼はこれらの日本の農器具はネパールの農業に役立つだろうと考えた。しかしそれらはおそらく火事で失われたと思われる。もしこの贈り物が届いていたなら、日本－ネパール協力の第一号となっていたであろう。

私による一切経の確認と調査は、あとで述べよう。

河口は1905年12月までボーダナートに滞在、サンスクリット仏典の集まるのを待ち、自身も収集した。その間、大王から求められて、10月22日、「ザ・メモリアル－平和と栄光」と題する57ページに及ぶ英文の長い手紙を提出した。すでに『ネパリ』

(1992)、『ヒマール』(1993) 両誌に発表されたので、ご存じであろう。これにはネパールの近代化に対する提案が細かく書かれている。その原文と日本語訳文は私が編集した「河口慧海著作集」第一五巻で公刊された(2001)。

河口はその後インド、ヴァラナシに滞在、サンスクリットの研究や翻訳、仏陀の遺跡の調査を続け、1913年暮れにカルカッタを発ち、チベットへ再入国し、15年9月帰国した。その間1907年2月ルンビニを訪れたらしい。

経典を求めて

1910年、京都帝国大学の榊亮三郎は、ネ

パールでサンスクリット仏典を収集したらしいが、詳細はわからない。

1912年9月、大谷光瑞の命により、青木文教はチベットへ入るため、ネパール東部のイラム、ウルンゾンを通った。

ヴァラナシにある河口の宿舎に、日本からの若い僧たちが集まっていた。1912年英国からの帰り道、東京帝国大学の高楠順次郎教授も寄った。そして河口の案内で、高楠、増田慈良、溪道元が、旅券なしでネパールに入り、ルンビニなどの仏蹟調査をした。

その後すぐ、1913年1月－2月、高楠、河口、長谷部隆諦の三人がネパールに入り、サンスクリット仏典の収集をした。

P・ランドンの著書『ネパール』(1928)の巻末付録のネパール訪問欧人リストに「ミスター・J・タカ東京大学教授、ミスター・エカイ・カワグチ、氏名不詳の日本人2名、1913年1月－2月、サンスクリット写本研究のため」とあって、高楠の名の一字が欠けている。高楠は大王に謁見をし、意見を求められ、普通教育を提案したのに対し、大王はその利益を否定し、非文明論、非教育論を話した。また大王は日本に留学生を出したが、役にたたぬ、やめてしまった、といった。

長谷部の記録によれば、パタンのある仏教寺院(多分黄金寺)で、日本に留学したネワール人のヘム・バハドゥールが日本語で話しかけた。彼は日本人を懐かしく思い、町を案内した。長谷部は国立図書館(多分ビル・ライブラリー)を訪れ、「日本の一切経は先年河口の寄贈で、見る人は誰もいないが、立派に揃っている」と書いた。彼は河口が献上した一切経の唯一の証人となった。この年1913年は経の各冊に押された大王のスタンプの年でもある。東大に収まっている高楠・河口の収集したサンスクリット写本仏典は566部、うち390部は河口の収集という。その目録は松濤誠廉によってつくられた(1965)。

一切経の確認

経典が無事であったことはわかっていたが、全部揃っているかどうか、果たして大王に献上されたかどうか、またそれが現在まで保管されているかどうか、はっきりしなかった。私の1998年のネパール訪問の目的はこの経を見ることと、それらが本当に河口が大王に献上したものであるかどうかを確認することであった。1998年9月4日、アビイ・スベディ教授と考古局国立古文書館を訪問した。

ネパール人にとって漢字を読むことはたいへん難しい。事実、ネパールで誰も一切経の評価をしなかったし、忘れられていた。

国立古文書館の一切経は間違いなく黄蘗山萬福寺で印刷された日本の版であった。各包み5、6冊の本のかたちをした経である。その最後の包みの番号は275であるが、最初私が数えたときは249しかなかった。他の包みは失われたのであろうか。幸いにも26包みは、番号なしで、他の場所にあった。全部の包みの数は正確に275であった。これで完全な一切経であることがわかって、喜んだ。

次の問題はこの一切経はチャンドラ・シヤムシェル大王に献上されたものであるかどうかの確認である。各冊の最初と最後のページに、チャンドラ・シヤムシェル大王のスタンプが押されていた。日付はビクラム暦1970BSすなわち1913ADであった。河口が献上したのは1905年であるが、収蔵されたのは遅れたのであろう。

報告書のなかで、いくつかの提案をしたあとに、私は次のような言葉でむすんだ。

「この経は日本とネパールの友好が93年前に始まったことを示すシンボルである」。

一切経調査

河口が1905年に大王に献上した一切経の存在を確かめることはできた。しかしそれは完全なセットかどうかわからなかった。私はさらに調べたいと思った。私は1999年

8月30日、アビイ・スベディ教授と国立古文書館を再訪した。館長の許可を得て、8月30日から9月9日まで、次のような仕事をした。

- 1 包みと本の清掃。
- 2 「千字文」に従い、目録の順に本を並べた。
- 3 各冊に番号をつけ、始めの番号を包みの番号、終わりの番号を本の番号とした。
- 4 包みの表題、本の表題、なかの経の表題のチェックをし、もし違っておれば記録した。
- 5 包みと本に表題がなければ、付けた。
- 6 表題と内容が違っておれば、訂正した。
- 7 包みに番号をふった。
- 8 番号順に包みを並べた。

すべての包みとすべての本を調べた結果、国立古文書館の一切経は完全に保管されていることがわかった。われわれ日本人はビル・ライブラリーと国立古文書館に94年間も保管されていたことに感謝したい。

包みの総数は275、本の総数は2100。

ただし残念ながらふたつの包みにわずかな虫食い状態がみられた。また残念ながら、日本で製本時にできたと思われる落丁、欠ページがわずかにみられた。萬福寺の協力を得て、これら欠損部分のコピーを持参し、国立古文書館に寄贈する予定である。

私は包みの番号と本の番号をいわゆる南條目録（漢訳一切経目録）に付け加えた。その目録には、各経の漢字の題、中国語読み、英語の題、ローマ字表記のサンスクリットの題、そして英語の説明が付いている。河口慧海がチャンドラ・シャムシエル大王に1905年献上し、現在国立古文書館にある一切経の記録として、包みと本の番号を付けた目録を、1999年11月17日、東京でネパール王国マテマ大使に贈呈した。

河口はなぜかくも多量の経を日本から持ってきたのだろうか。もちろん大王との約束に従ったのであるが、おそらく日本でつ

くられた一切経を、釈迦の誕生地の国に返したいと思ったに違いない。そして、インドーシルクロードー中国ー日本ーインド、ネパールという、アジアにおける仏教の偉大なサークルを完結させたかったのであろう。

参考文献

- 1) 南條文雄 1883 (1977) *A Catalogue of the Chinese Translation of the Buddhist Tripitaka, the Sacred Canon of the Buddhist in China and Japan*. 『大明三蔵聖教目録』 Oxford University Press, Oxford (開明書院)
- 2) 「東洋に於ける探見者と留學者」『帝國東洋學會會報』2: 9, 1902.
- 3) 「ネパール人河口慧海師を訪ふ」『中外日報』1155号 明治36年7月27日
- 4) 河口慧海 1904 (66, 99) 『西藏(チベット)旅行記』上・下 博文館(講談社、「河口慧海著作集」第一巻、第二巻 うしお書店)
- 5) Ekai Kawaguchi 1905 (2001) *The Memorial, Peace and Glory*. 「河口慧海著作集」第一五巻586-643 高山龍三訳 2001「覚書平和と栄光」572-585 うしお書店
- 6) 清水黙爾 1907 「朶士林に入るの記」「大宮孝潤氏宛書簡」「家親宛書簡」島地雷夢編輯 『紫風全集』259-269, 323, 352, 367 鶏声堂
- 7) Ekai Kawaguchi 1909 (79, 99) *Three Years in Tibet*. Theosophist Office, Madras (Ratna, Kathmandu. 「河口慧海著作集」別巻一 うしお書店)
- 8) 河口慧海 1910 (2001) 「印度に於ける釋迦如來の靈跡は今如何にあるか」『富の日本』1巻6号64-66 (「河口慧海著作集」第一五巻508-511 うしお書店)
- 9) 高楠順次郎 1914 「ネポール國に就いて」『地學雜誌』①26年302号97-108、②304号271-279、③305号349-357
- 10) 渡邊海旭 1918 「梵語佛典の發見と蒐集」『歐米の佛教』93-102 丙午出版社
- 11) 青木文教 1920 (69, 90) 『秘密之國西藏遊記』内外出版社(芙蓉書房、中央公論社)
- 12) Perceval Landon 1928 (76) *Nepal*. 2 vols. Constable, London (Ratna, Kathmandu).
- 13) 河口慧海 1929 (2000) 『釋迦一代記』4

- 金の星社（「河口慧海著作集」第六巻 うしお書店）
- 14) 長谷部隆諦 1930 「尼波羅入國記」『長谷部水哉遺稿集』1-108 長谷部隆諦師遺稿刊行会
 - 15) 本多惠隆 1931 「佛陀誕生地に詣でた最初の日本人の感想」『大阪時事新報』昭和6年4月6日
 - 16) 清水黙爾 1937 「尼波羅探検日記抄」『新西域記』上巻91-105 有光社
 - 17) 島地大等 1937 「尼波羅通信」『新西域記』上巻105-107 有光社
 - 18) 溪道元 1962 「ネパールに入る」「釈尊降誕地に参拝」『南亜旅行記』56-65
 - 19) Matsunami Seiren 1965 *A Catalogue of the Manuscripts in the Tokyo University Library*. Suzuki Research Foundation, Tokyo.
 - 20) 河口慧海 1966 (2000) 「入藏記」『第二回チベット旅行記』河口慧海の会（「河口慧海著作集」第一四巻572-643 うしお書店）
 - 21) Kamal Mani Dixit 1992 “About Kawaguchi Ekai’s letter to Chandra Shumsher.” *Nepali*, Feb/Mar 1992 : 3-18.
 - 22) D.Thapa 1993 “Sleuth, Monk and Consultant.” *Himal*, Jun/Aug 1993 : 24-25.
 - 23) H.B.Barua 1996 “The First Nepali Students in Japan (1902).” *The JUSAN*, 1-3 : 3, 6, 7.
 - 24) 高山龍三 1999 『河口慧海 人と旅と業績』大明堂
 - 25) Abhi Subedi 1999 *Ekai Kawaguchi: The Trespassing Insider*. Mandala Book Point, Kathmandu.
 - 26) 高山龍三 2000 「河口慧海のおもい」『黄檗文華』119号21-34
 - 27) *Symposium on A Century of Nepali Students in Japan and Perspective for 21st Century*. The Embassy of Japan and JUSAN, June 2002.
 - 28) 高山龍三 2002 『展望 河口慧海論』法藏館

ABSTRACT

Kawaguchi Ekai and the Beginning of Cultural Exchange Between Japan and Nepal

Nepal Report in 2002

Takayama Ryuzo

The year 2002 completes a century since the first Nepali students came to Japan in 1902. To commemorate this anniversary, the Embassy of Japan, Japan University Students' Association, Nepal (JUSAN) jointly organised some events. The first one was a symposium on 'A Century of Nepali Students in Japan and Perspective for the 21st Century'. I was requested to present a paper to the symposium.

The symposium was held on 7 April at the Embassy hall in Kathmandu. The programme had two sessions. In the first session, Mr.Harendra Barua presented a paper entitled *Historical Overview: Pioneer Nepali Students in Japan, A Century Ago*. I presented a paper on *Kawaguchi Ekai and the Beginning of Cultural Exchange Between Japan and Nepal*. In the second session, the eminent economist and former Ambassador to Japan Dr.Badri P.Shrestha presented a paper on *Contribution of Japan Trained Nepali to Our Development*.

The symposium was a success, with about 100 scholars and participants. The newspaper reported on the symposium on the next day.

I presented the catalogue with the number of packages and books which I checked and arranged in 1999, as a record of the Tripitaka which Kawaguchi Ekai presented to Maharaja Chandra Shamsher in 1905, to the National Archives on 9 April.

On 19 April, a ceremony for the presentation of the Imanishi Memorial Fellowship Award was held with the participation of the Japanese Ambassador, Honourable Minister for Physical Planning and Works, JUSAN members and myself. I read the address for the Sakai Lions Club. An abstract of my paper is as follows.

After Meiji Restoration many young Japanese Buddhist monks were alarmed at the decline of Buddhism in Japan, and some of them wished to enter Nepal or Tibet in order to acquire original Buddhist sutras. Kawaguchi Ekai was the first Japanese to enter Nepal on 26 January, 1899. Then on 4 July, 1900 he entered Tibet by crossing a pass in the Himalayas. Later he stayed in Nepal: in 1903,1905,1912,1913. In total, two and a half years.

According to his famous book, *Three Years in Tibet*, the purpose of his travel was

to collect original Sanskrit Buddhist sutras of Buddhism and their Tibetan translations. Shimizu Mokuji, Omiya Kojun and Oda Tokuno went to India for the purpose of entering Nepal, only Shimizu entered Nepal, at Tarai. And Shimizu wished to collect many materials in Nepal in order to inform Japanese.

While Kawaguchi was in Nepal from February to March in 1903, Shimaji Daito, a member of the expedition lead by Otani Kozui, was doing archaeological research on the Buddha in Tarai. From February to March, 1903, Shimizu, Honda Eryu, and Inoue Koen, the members of the expedition lead by Otani Kozui, entered Tarai, went to Lumbini (Lumbini), where they did archaeological research on Buddhist artifacts.

Kawaguchi came back to Japan in May 1903. Two months after his return he met two Nepalese students, Jang Narshing Rana and one other, who had already been studying for one year in Japan. Buddha Vajura, the chief priest of Bouddhanath, sent a letter to Kawaguchi on the Russo-Japanese War. Kawaguchi guessed that it was actually the Maharaja's question to him.

Then Kawaguchi carried one set of the Tripitaka printed in Obakusan Manpukuji, and presented it to the Maharaja in 1905. Kawaguchi stayed in Bouddhanath, and was requested by the Maharaja to present a long English letter titled 'The Memorial, Peace and Glory'(57 pages.). It was published in the journals *Nepali* (1992) and *Himal* (1993). Kawaguchi's detailed proposal on the modernization of Nepal was in it. The English letter and its translation were published in *Kawaguchi Ekai Chosaku Shu (Complete Works of Kawaguchi Ekai)*. Vol. 15, 2001, which I edited.

Sakaki Ryosaburo of Kyoto Imperial University might have collected the Sanskrit sutras of Buddhism in 1910, but the details are not clear. Aoki Bunkyo passed Ilam and Urunzon in eastern Nepal, and entered Tibet by the order of Otani Kozui in September 1912.

Professor Takakusu Junjiro of Tokyo Imperial University, Masuda Jiryo and Tani Dogen entered Nepal without visas under Kawaguchi's guidance, and researched sites of Buddhist ruins. Soon after this research, Takakusu, Kawaguchi and Hasebe Ryutai entered Nepal, and collected Sanskrit Buddhist sutras in January and February 1913. Takakusu had an audience with the Maharaja, and Takakusu was asked his opinion. The number of the Sanskrit manuscripts collected by Kawaguchi and Takakusu in Tokyo University was 566. Among them, 390 manuscripts were collected by Kawaguchi. These Catalogue were made by Professor Matsunami Seiren in 1965.

The main objective of my visit to Nepal in 1998 was to look at these sutras and establish whether or not they were the real ones that Kawaguchi presented to the Maharaja. I visited the National Archives, Department of Archaeology with Professor Abhi Sbedi, on 4 September, 1998. The Tripitaka in the National Archives was the exact Japanese edition hand-printed in Obakusan Manpukuji.

The total number of the packages was exactly 275. I was very delighted to find the complete Tripitaka in the National Archives.

The next problem was that of the authentication of the actual dedication of the Tripitaka to Maharaja Chandra Shamsher. I confirmed that the front and the last pages of each book bore the seal or stamp signet of Chandra Shamsher Rana. The date was recorded as 1970 B.S., or 1913 A.D.

After making some proposals in my report, I concluded with the following words :
“The sutras are the symbols of a Nepal-Japan relationship that started 93 years ago.”

I would like to do further research based on my proposals. I visited the National Archives with Professor Abhi Sbedi on 30 August, 1999 again. After checking all packages and all books, we have found the Tripitaka of the National Archives in a completely preserved state. We, the Japanese, thank the Bir Library and the National Archives for preserving it for 94 years. The total number of the packages was 275, and the total number of the books was 2100.

I am sorry to say that two packages were badly eaten by worms. Also, I was sorry to have found a small misarrangement and missing pages, from the stages of book-binding back in Japan.

Why had Kawaguchi brought such voluminous sutras from Japan? Though he surely wished to present the Tripitaka according to his agreement with the Maharaja, there is no doubt that he wanted to return the Tripitaka made by the Japanese to the country of the Buddha's birth, and to complete a great circle of Buddhism : India-Silkroad-China-Japan-India, Nepal.